

## 英語の力を培い、飛躍



「自分のアイデアと社会的ニーズが合致する仕事を見つけてほしい」と話す藤井康次郎さん

「生徒の力を伸ばすことができる先生が多かった」と言う。

学校に有名な卒業生を招き、学生と議論する場を設けるイベントも心に残っている。元首相の海部俊樹さんや哲学者の梅原猛さんの話を聞き、自分で課題を設定して解決していくことの大切さを実感した。

東京大学法学部在学中、日本とアメリカの大学生が国際問題などについて話し合う「日米学生会議」に関わり、法曹の道に進むことを決意する。

年に10回程度は海外に出張。力ではなく、ルールに照らして国際問題を解決しようとする。最近では若い弁護士育成にも力を入れている。著作権やライセンス契約を専門とする弁護士、寺尾滋久さん(49、86年

卒)は高校卒業後、単身でアメリカの大学に行く。両親の反対を押し切ったかなえた夢だったが、「最初は言葉の壁が越えられず、つらすぎた」と笑う。

高校生の時、当時は同好会だったアメリカンフットボールを部活に昇格させた。しっかりと体制をつくるために、入部してくれる生徒をさがしたり、プレーに関する英語の本を自分で翻訳しながら勉強したりした。必要に迫られて英語を勉強するうちに、英語の成績はぐんぐん上がった。

勉強するうちに、アメリカへの関心も芽生えた。アメリカの大学に進学するための学費を稼ぐと、高校3年生で早朝アルバイトを始めた。アルバイト先からの電話で事情を知った両親は、「どうやら本気らしい」とあきらめてくれた。

卒業後は、アメリカのABCニュースでドキュメンタリーの制作に打ちこむ。NHKとの国際共同取材で実現した「映像の世紀」も担当した。

17年間をアメリカで過ごしたが、父親の病を機に帰国。それまでの経歴を生かし、番組契約や著作権に関わる弁護士として再スタートを切った。

「アメリカでは、法律家が大活躍していてあこがれたから」(浴野朝香)



先生も巻きこみながら手探りでアメフト部をつくり上げたという寺尾滋久さん